

〔新人紹介〕

養豚アグリスクール 【Certificate in Swine Production and Management 2019・タイ】 に参加して

櫻井夏実

(伊藤忠飼料株式会社 研究所 予防衛生チーム 〒325-0103 栃木県那須塩原市青木 919)

All about SWINE 55, 33-35

この度出張で海外の養豚研修に参加する機会を得て、タイで行われた研修に参加してきました。研修を通じて学んだこと、感じたことを紹介します。

〈研修概要〉

参加したのは Progressus 社主催・DSM 株式会社がスポンサーを務める【Certificate in Swine Production and Management 2019】という養豚アグリスクールです。研修は農学部を看板学部とするタイの国立大学であるカセサート大学・カンペンセンキャンパスで実施され、タイ、フィリピン、インドネシア、シンガポール等のアジア各国から、添加剤・飼料メーカーの担当者、農場管理者、コンサル、カセサート大学の先生や学生等、12カ国・26名の参加者が集まりました。講義内容は飼養管理、栄養、バイオセキュリティ、育種等多岐にわたり、活発に質問・議論が行われました。研修の最後には実際の農場を例として問題点や改善策を話し合うグループディスカッションも実施されました。

〈トピック〉

- ・タイの養豚事情：“Wet Market”も未だ残っているものの、衛生的な食肉処理場や精肉店での販売に移行しつつあるようです。近年ではバラ肉が高く売れる傾向にあり、脂ののりややわらかさといった質も重視されるようになってきていることから、良質なバラ肉を多く生産できるような系統が使われています。3元豚が一般的で、ヨークシャー×ランドレースのF1にデュロックまたはピートレンの雄をかけることが多いようです。また、黒豚も高く売れるそうです。
- ・アフリカ豚コレラ：疾病面に関してはやはりアフリカ豚コレラが最大のトピックであり、ウイルスの特徴や診断、現在の大流行に至った要因、バイオセキュリティについて詳しく説明がなされました。拡散の最大の要因は不適切なバイオセキュリティであり、他の疾病と同様トラックや人の移動により中国国内・近隣諸国へ拡大したと考えられています。また、屠畜場でのモニタリングシステムがうまく働いていない、殺処分に対する補償がないことで流行に歯

止めが利かない状況になっているようです。

- ・抗生物質使用量の削減に向けて：成長促進目的での抗生剤の使用が禁止されている EU の事例が説明され、薬剤耐性菌をめぐる問題への対応はアジアにおいても今後必須であるとして、AIAO をはじめとする衛生管理や正しい使用方法、代替物質の紹介がなされました。代替物質としてはプロバイオティクスとプレバイオティクスを組み合わせたシンバイオティクスや、エッセンシャルオイルと有機酸の混合事例が紹介され、複数の方法を組み合わせて使用し効果を高めることが重要とのことでした。

〈所感〉

まず感じたのはアジアの養豚の勢いです。アジアでは世界の豚の 84% が飼養されており、特に中国、インド、インドネシア、タイ、フィリピンなどの台頭がめざましく、今後急激な経済発展とともに養豚の規模も拡大していくと考えられま

す。講義では自動給餌システムや自動選豚システム等の最新テクノロジーも紹介され、こうした技術も急速に普及していくのではないのでしょうか。大規模な農場の経営者や管理をされている方やコンサルを行っている参加者も多く、生産性の向上に強く関心をもっておられ、そういった方々の話を聞くことも刺激になりました。アジアの動向には常に目を向け、こうしたなかで日本はどのようにやっていくのかを考えていかなければならないと感じました。

一方、衛生管理の面ではまだまだ改善の余地があるように思いました。アフリカ豚コレラは 2018 年に初めてアジアに入ってきたウイルスですが、拡散の要因や対策はこれまでの疾病と基本的に同様です。講師も「アフリカ豚コレラの拡大を防ぐために最も大切なことは、特殊な管理やワクチンの開発ではなく、基本の衛生管理だ」と何度も繰り返しており、いかに基本が重要かを改めて認識することとなりました。



写真：各国の参加者たちと

今回の研修は養豚の基礎を幅広く取り扱った内容となっており、普段の業務から少し離れた栄養学や育種、繁殖についても触れることができ勉強になりました。私は普段主にラボ内での疾病関連の検査や衛生面での技術支援を担当しておりますが、健康な豚を育てるには合わせて栄養面や飼養管理面のサポートも必須であり、そういった分野に対する興味も高まりました。これを期に自分の専門から少しはなれた分野に関しても勉強し、広い視野でお客様にとってより良い提案ができるよう努力していきたいと思いました。

また研修には養豚についての知識を深めることに加え、参加者間で積極的に交流するというテーマがありました。思うように会話や質問をするに

は学術的知識や英語力のみならず積極性やコミュニケーション能力が必要だと痛感した研修でありましたが、たどたどしくも各国の様々な立場の人と話し合い共に勉強できたことは貴重な経験となりました。

今回の経験を通して、自分の中にこれまで無かった「引き出し」を増やすことができました。そして大事なことはこれをいつどのタイミングで使うことができるかだと感じています。実際に農場を訪問し改善策を考えていく中で、学んだことを一つでも思い出してお客様の問題解決に役立てることができるよう精進していきたいと思いません。